

## 【論文】

## コミューター・マリッジの実態と含意—歌手、加藤登紀子の回想録を基に—

三善勝代

**The Actual State and Implications of a Commuter Marriage :  
Based on the Memoirs by Singer Tokiko Kato**

Katsuyo MIYOSHI

This paper examines the actual state and implications of singer Tokiko Kato's commuter marriage as described in her memoirs by decoding her situation and comparing it with the author's existing research data. Unlike a common concept of a commuter marriage as a temporary treatment, their separation period lasted as long as 21 years. Her husband's move into farming led to their separation. Upon reaching a decision to separate, Kato experienced hesitation and emotional conflict, and even encountered a divorce crisis—few informants identify similar conditions. Main factors underpinned the hesitation were a lack of foresight and preparation in dealing with the separation, a lack of a person who could assist domestic duties and child-raising in her new residence, and her husband's conservative perspective on marriage. However, by being liberated from conventional wisdom, the couple not only avoid a crisis in their relationship, but also grew to accept the separated lives, which in turn led both to achieving self-actualization. The ideal and practice of “farming life” that Kato succeed from her husband asks people to reconsider their own lifestyle individually. It can be considered that her life of separation had a significance for society and future generations, in way that supersedes the issues of maintaining her work and intimate relationship.

**Keywords:** commuter marriage, actual state and implications, singer Tokiko Kato, memoirs, lifestyle

## 【目 的】

コミューター・マリッジとは、共働き夫婦が仕事の都合で一時的に離れて暮らす場合を指す<sup>1)</sup>。歌手、加藤登紀子の回想録を一瞥すると、その名称こそ用いてはいないものの、当該生活形態を営んでいた様子が窺える。彼女はなぜこれを選んだのか。夫との別居生活はどう展開され、結局のところ、どんな評価が下されたか。その意義はどこにあると言えるか。

本研究において、こうした疑問の解明を試みたい。すなわち、本研究の目的は、加藤登紀子の回想録によって、彼女のコミューター・マリッジの実態と含意を明らかにすることである。

## 【方 法】

### 1. 研究方法の概要

加藤登紀子（以下、「加藤」と略記）の回想録を読み解き、得られたデータを分析する。この分析においては、より明示的な知見を導き出すべく、筆者による1989年調査結果との対比を試みる。

加藤を調査対象とした理由は、筆者が彼女とほぼ同世代にあり、その生き方に関心を抱いてきたことにある。また面接・聞き取りではなく回想録によるのは、もともと公開を意図して出版された著作であれば、それに真摯に対峙することで、行間から著者の真意が汲み取れると思えたからである<sup>2)</sup>。

さらに、筆者による調査とは、週に3日以上、1年以上の間離れて暮らす専門職・管理職の共働き夫婦50組に対する面接・聞き取り調査（以下、「専門・管理職調査」と略記）を指す<sup>3)</sup>。20年前の実施であり、現時点からすると陳腐な印象を受けるかもしれない。しかし、加藤がコンピューター・マリッジを開始したのは1981年であり、同年代でこの種の調査は他に見当たらない。むしろ本研究で用いるには適切と判断された。

### 2. 使用資料の概要と読み解きの手順

読み解きにおいて主に用いる資料は、加藤の回想録『青い月のバラード』<sup>4)</sup>である。これを主資料とした理由とその構成と骨子、および読み解きの手順は、次の通りである。

#### 2. 1 主資料選定の理由

加藤は2002年に夫、藤本敏夫（以下、「藤本」と略す）に先立たれた。その後、追悼の意を込めて次々と著作を出版し、彼との生活を回想している。前掲書『青い月のバラード』はその一冊であるが、ほかに、獄中の藤本との往復書簡集『絆』<sup>5)</sup>や『農的幸福論 藤本敏夫からの遺言』<sup>6)</sup>がある。これらのうち、コンピューター・マリッジに関しては、『青い月のバラード』が最も詳しい。そこで、本研究では主にこれを用い、他の著作で補足することとした。

#### 2. 2 主資料の構成と骨子

本書は全6章から成り、章題は「出発」、「運命」、「抱擁」、「選択」、「未来」、「永訣」の順となっている。第4章「選択」において、コンピューター・マリッジ開始の経緯が詳述されている。

本書において加藤は、先立たれた夫、藤本との獄中結婚から永訣までを振り返る。そして、今も心に生きる夫と共に、新たな一步を踏み出そうと決意する。

#### 2. 3 読み解きの手順

回想録の読み解きにおいては、次のような手順を踏む。まず、加藤夫婦の略歴を把握する。続いて、コンピューター・マリッジ開始の経緯、別居生活の状況、および当該結婚形態の評価や意義について、関連すると思われる箇所を抽出し、文脈に沿った解釈を施して行く。

### 3. 専門・管理職調査における対象者の基本属性

面接・聞き取り調査の対象とされた専門・管理職夫婦50組の基本属性を示せば、年齢は40代が半数に迫り、30代がこれに次ぐ。子どもをふたり持つ夫婦が半数弱であり、最終学歴については、ほとんどが大学卒以上となっている。世帯年収（税込み）は、過半数が1100万円以上である。職業では、妻、夫とも教員が最も多く、次いで、妻の場合はジャーナリスト、夫は管理職となっている。なお、実査では主に妻が対象とされた<sup>7)</sup>。

## 【結果と考察】

### 1. 回想録の読み解き

#### 1. 1 加藤と夫、藤本敏夫の略歴<sup>8)</sup>

##### 1. 1. 1 加藤登紀子の略歴

1943年12月27日ハルピン生まれ。1965年東京大学在学中、第2回日本アマチュアシャンソンコンクールに優勝し歌手デビュー。「赤い風船」で66年レコード大賞新人賞、69年「ひとり寝の子守唄」、71年「知床旅情」でレコード大賞歌唱賞を受賞。以後、アルバム『今があしたと出逢う時』(2004年)に至るまで、60枚以上のアルバムと多くのヒット曲を世に送り出してきた。

歌手としての活動の他に、女優、また宮崎駿監督の『紅の豚』(1992年)では、声優としての魅力も発揮した。また、UNEP(国連環境計画)親善大使や千葉県鴨川市の農園「鴨川自然王国」での活動など、環境問題にも積極的に取り組んでいる。2005年に、歌手生活40周年を迎えた。

##### 1. 1. 2 藤本敏夫の略歴

1944年1月23日兵庫県甲子園生まれ。同志社大学で新聞学を専攻、大学2年の時に学生運動に参加し、京都府学連書記長に。羽田闘争を機に上京、明治大学を拠点に活動。数度の逮捕・拘留を経て、内ゲバ激化に反論し学生運動から離脱。72年4月21日、学生運動のリーダーとして公務執行妨害罪、凶器準備集合罪などで実刑判決を受け下獄。74年9月、栃木県黒羽刑務所から出所。

76年3月、大地を守る会会長に就任。翌年、有機農産物および無添加食品などの流通法人・株式会社大地を設立(代表取締役)。81年以降、千葉県鴨川市嶺岡山中に移住、農事組合法人・自然生態農場「鴨川自然王国」を設立。85年株式会社ネフコを設立(代表取締役)。地球納豆倶楽部を企画。95年、農産物需給研究会(GLS)を設立。2001年6月、持続循環型社会の推進母体IRM研究会を設立(代表)。2002年7月31日、死去(享年58)。

### 1. 2 コンピューター・マリッジ開始の経緯

加藤のコンピューター・マリッジは、夫、藤本の鴨川移住(1981年)で始まり、彼との永訣(2002年)まで続いた。したがって、その期間は21年間ということになる。

下獄中に将来の活路を農業に見出し始めていた藤本<sup>9)</sup>は、出所してからそれに向けての活動を開始。やがて、東京を離れて本格的に農業を始めたいと移住を提案する。しかし、出産を経てますます曲作りに突き動かされるようになっていた加藤は、その提案に戸惑いを禁じえない。

私は三人の子どもをお風呂に入れて、後片付けを済ませてからふとんに入った。

疲れているのに寝付けぬ頭を駆けめぐるのは、田舎暮らしへの不安と疑問。母や姉とも離れてしまっ  
て、果たしてあんな過疎の場所で暮らしていけるのだろうか。暮らすならまだしも、歌手生活は続けられるのか—続けられないとしか思えない。

そりゃあ、男にとっては最高の環境だろう。東京と田舎を行ったり来たりして、田舎に帰れば奥さんと子どもがちやんと待っている。家の前には自分の田畑もある。でも、女にとってはそうはいかない。日々の生活の大変さを具体的に背負うのは女の方だ。下手をすれば私は一歩も外に出られなくなる。あれやこれやシミュレーションを続けて、出てきた答えはひとつ。

翌朝、私は起きてきた彼にきっぱりと宣言した。

「私は行かないわ。田舎で暮らすのは絶対に無理。このまま東京に住みます」。(加藤、2007、p.116)

そして、何度か話し合いを持つ。加藤が訴えた田舎暮らしの不安に対し、藤本からは次のような言葉が返される。

「今の生活？ これは全部お前がつくってきた生活じゃないか。俺は俺の収入で、新しい生活を始めたんだ。今までの生活を全部切り捨てて」

「私がつくってきた生活ですって？ あなたは関係ないというの？」

「そうだ。お前の収入でお前が勝手に作った生活だ。俺はヒモじゃない。俺の収入で新しい生活を始める権利がある」

私はめまいがしそうになった。結婚して8年。うち2年以上は刑務所生活。出所してもすぐには経済的活動ができないことは百も承知だった私は、自分が彼のハンディキャップを埋めることができればいいと思ってやってきた。彼の方も、その辺のことはあまり負担に思うことなく、次のステップに進んでくればいいとしてきた。しかし、彼はそうではなかったのだ。心のどこかで、今の生活をずっと拒否し続けていたのだ。

8年間、胸に秘めていた本音がついに表に出る。彼の何よりの大きなこだわりは、収入の問題。そして加藤登紀子の夫と見なされることだった。

「あなたは革命家じゃなかったの？ 古い社会から新しい時代へ、そのために生命をかけて来たんじゃないの？ そのあなたが『ひとつの船に二人の船頭はいらない』なんて古色蒼然とした結婚観を持っていたなんて信じられない」。(加藤、2007、p.119-120)

しかし、どちらも譲らないので、一時は離婚も覚悟する。

ところがしばらく経ったある日、藤本が仲人役の引き受けを打診してきた。この役目はひとりでは演じられない。これが仲直りの合図となって、離婚の危機は回避された。その結婚式で、彼は次のような挨拶をする。

「ぼくたちはこんな晴れやかな結婚式をあげることもできなかつたし、女房に花嫁衣裳を着せてやることもできませんでした。刑務所の中、国家の立会人の前で意思を確認しあった日が、僕たちの結婚式だったことを思い出します」。(加藤、2007、p.130)

これを加藤は、獄中結婚に踏み切った時点の心境に戻って再出発をしようというメッセージであると受け取っている。実際、本研究の補足資料とした往復書簡集『絆』には、ふたりのパートナーシップの強さを示唆する文言が認められる。その一例は、書簡No.101「京都で鶴見先生にお逢いしました」（1973年10月6日付の登紀子発速達）にある。

こんな風にあなたと離れて暮らしていてもおかしいくらいに同じ方向にむかって歩いている気がします。(加藤・藤本、2005、p.395)

別の例は同書第Ⅱ部終章「加熱する農業志向」のまえがき「最後の春、そして夏」に見られる。

獄中の日々は、彼の思想の根幹を肥やし、二人の結婚の根を築いた。  
 今とてもありがたいと思う。(加藤・藤本、2005、p.459)

また、物分れには終わったものの本音で話し合ったことも、離婚の回避に繋がったと指摘する。

あの夜、恥も外聞もなくという感じでお互いの腹のうちをさらけだし、行くところまで行った私たちの間には、何かすがすがしいものが生まれてきた。“こうあるべき”という通念からお互い解放されて、自分たちなりのあり方を受入れる態勢ができてきたのかもしれない。(加藤、2007、p.131)

### 1. 3 別居生活の状況

社会通念とは別の生き方を決意してからは、藤本の夢を理解できるようになったばかりか、別居生活を子どもたちと共に楽しめるようになった。

いよいよ単身「農」の現場へ。果たして本当に自分に農作業ができるのかどうか、確たる自信があったわけではない。でも、人間の生きる原点というべき「農的生活」を取り戻さねば、という大きな夢が彼を駆り立てていた。(加藤、2007、p.134)

彼は私に、自分のこの先の夢を熱く語った。

農村を単なる生産の場として見る近代のシステムは、ライフスタイルを衰退させている。農村を環境浄化場として、生命教育の場として、ホリスティック病院として、さらに自己能力開発レジャーランドとして大いに活用していこう。そうした多目的農業を実践することでゆるやかな新しい共同体をつくり、人々と「農」のかかわりを復権させたい・・・と。(加藤、2007、p.134-135)

彼が鴨川近くの山中に居を移したことは、東京に残った私たちにとっても、大きな楽しみを与えてくれることになった。長いお休みのときは、子どもたちは決まって鴨川へ。大自然の中で、彼女たちは野生に戻って思い切り飛び跳ねた。糞のついた鶏の卵を磨いたり、木になっているみかんを採ってきてジュースを作ったり・・・。(加藤、2007、p.135)

### 1. 4 コミューター・マリッジについての評価

別居通い合いの生活を加藤は「二元生活」と称し、それを次のように評価している。

二元生活は、私と彼に安定したポジションをもたらしてくれた。彼は「土」。私は「風」。

東京の暮らしは私が全部責任を持ち、鴨川はすべて彼がまかなった。鴨川へは甲子園からお義母さんが移り住んでくれたので、大助かり、私はすっかりお客さんになっていればよかった。その代わり東京では彼もお客でいい。これまでの収入のもやもやはいつの間にか消えていった。

私は鴨川であれこれまめに働く彼を見ているのが好きだった。山に入るときも、カマを持って先を行き、枝をはらったり、草を刈ったり、道をつくってくれる。せっせと畑から野菜を採って、料理も自分で作った。

娘たちに薪を割れと命令し、「父さん」の見本を見せている。

「僕の暮らしをしたい」といったその思いの強さを、私は美しいと思った。(加藤、2007、p.136-137)

こうしてふたりは、世間の夫婦像にはとらわれない、独自のあり方を確立して行く。1987年の結婚15周年パーティーで、藤本は「加藤登紀子のダンナといわれて、忸怩たる思いをしたこともあったけれど、今はもう全然何とも思いません。離婚の危機とかいろいろありましたが、この自然がそれを乗り越えさせてくれました」(加藤、2007、p.143)と語り、これを受けて加藤は次のように記している。

私たちがたどってきたコースは、多分、多くの人たちと同じように、結婚している自分と本当の自分のぶつかりあいだったと思う。結婚しているからこうしなければ、結婚しているからこうなんだ・・・の繰り返し。でも、もうそういう結婚という形には縛られず、お互い自分の好きな道を、好きなやり方で進んでいこう。それが私たちのあり方だという表明を行ったわけである。(中略)それを私たちは15年の歳月をかけて学んだのだ。(加藤、2007、p.144)

この年、彼女は43歳。「二元生活」を始めて6年目であった。この文章に続く章末を、「結婚と歌と子育てとに引き裂かれることもなく、すべてが“加藤登紀子”という太い川となって流れ始めるのを感じていた。」(加藤、2007、p.145)と締め括っている。

さらに、藤本に生じた「生き方革命」も見逃せない。これは、別の補足資料、加藤編『農的幸福論』に示されている。たとえば、その一つは第4章第2節2項「百姓になりたい」の末尾である。

「離婚」の二文字を越えてから6年、東京と鴨川の二元生活に入ってからのは、いろんなことを思い切り楽しんでいた。

「楽しくないや人生じゃない！」

自分の手足で自分の生活を生み出す喜びこそ、いまここからはじまる革命なのだ。国家権力を奪い取って社会を変えるということに手痛い敗北をした彼の新境地がここにあった。(加藤編、2009、p.207)

同書同章第3節3項「ここは時代の最先端」からは、藤本の理念と実践を未来に繋げようとする、加藤の意図が読み取れてくる。

藤本敏夫が死の直前、必死のプランをしていった「里山帰農塾」は、1年に数回のペースで行われている。

共同作業の体験を通して農的生活を味わい、日本の現状や時代の可能性を見詰める素晴らしい場になっている。

はじめの予想とはちがって、ここにも熟年層と同じくらい、若者たちが集まってくる。

熟年たちも若者たちも、どちらも未来探しに来るのだから、ここは時代の最先端といってもいい。

手の届かない大きなものに振り回される生活から、自分の力で築ける暮らしへ、このあたりまえのことを、いま、できることからはじめようとする人たちは、みんなとっても明るい。(加藤編、2009、p.231)

## 1. 5 要約

回想録の読み解きから判明した事柄は、次のように要約される。

### 1. 5. 1 開始の経緯

コンピューター・マリッジ、つまり一時的な夫婦別居を始めることになったきっかけは、夫による「農的生活」実践のための東京脱出、千葉県鴨川市への移住である。

別居を決めるまでには紆余曲折があり、一時、離婚の危機にも遭遇した。移住の提案は、結婚して8年目のことであり、加藤は育児期真っ只中にいた。もしも提案を受入れて田舎に行けば、身内(母や姉)から得ている家事・育児の協力が期待できなくなり、自由な歌手活動が阻まれてしまうかもしれない。彼女の中に、彼との田舎暮らしへの不安と疑問が湧き起った。また、夫が旧態依然とした性別役割観の持ち主であったことも、彼女に衝撃を与えた。

しかし、加藤たちは獄中結婚の時点ですでに、人生のパートナーとしての配偶者選択を行っていた。このような間柄のふたりが分かり合えないわけではない。本音で語り合っ、社会通念に左右されない、自分たちなりのあり方を受入れると決め、離婚の危機を脱出することが可能となった。

### 1. 5. 2 別居生活の状況

このような経緯で開始された「二元生活」は、子どもたち(3人)の成長につれて次第に大きな楽しみが変わった。夏休みには必ず、彼女らと共に夫の元を訪れ、また、相手宅では互いにお客になるようにした。そして結局、この生活は21年間(1981年~2002年)に及んだ。

### 1. 5. 3 コンピューター・マリッジについての評価

この「二元生活」を、加藤は“夫は「土」で私は「風」”と比喻し、夫婦の安定したポジションの確保であると評価している。ここでポジションとは、精神的な意味も含む「自己の存在位置」を指すのではあるまいか。であるならば、その確保とは、マズローの言う「自己実現」欲求の充足に通じるものと解される<sup>10)</sup>。実際、夫の藤本は、かつて獄中で描いた夢の「農的生活」を、鴨川の地にて土を相手に実践できており、妻の加藤は、本来の芸能活動のほかに、国連環境大使としての活動などを加え、幅広く活躍することが可能となっている。そして、夫亡き後は、彼の理念と実践を引継ぎ、未来に向けて賛同の輪を広げるべく発信中である。

## 2. 専門・管理職調査結果の概要

専門・管理職のコンピューター夫婦50組に対する調査からは、概略、次の諸点が判明している。

### 2. 1 コンピューター・マリッジ開始の経緯<sup>11)</sup>

#### 2. 1. 1 別居決定の契機

コンピューター・マリッジつまり一時的な夫婦別居を始めたきっかけは、大部分が夫か妻あるいは両者の転勤・研修、再就職、あるいは転職・勤務先変更といった「異動」であった。このうち、「夫の異動」が半数を超えて最も多く、「妻の異動」は2割、「両者の異動」は1割である。ほかに、結婚当初から別居している夫婦も10組おり、別居の決定に逡巡や葛藤があったとするケースは少なかった。

#### 2. 1. 2 開始の背景

そこで、別居の決定に至る背景を探ったところ、夫婦の関係と職務状況にかかわる事柄が存在していた。すなわち、要請された異動は昇進などを伴い、異動する本人にとって有利なものであったし、また夫婦の間には、それぞれが有能な上に社会通念に左右されない独自の人生哲学を持ち、互いに成長し合おうとする対等なパートナーシップの関係が築かれていた。

#### 2. 1. 3 別居決定の要因

別居の決定には、8要因—①別居の予測と備え、②周囲における別居例の存在、③別居期間の予測、④

仕事への積極的な関与、⑤柔軟な結婚観・家族観、⑥家事・育児協力者の存在、⑦子どもの意思、⑧その他（転居の忌避、職住接近の実現など）一の組み合わせが作用していた。これらのうち、①と②と③が別居に対する逡巡を減らしており、また、④と⑤はほとんどのケースで確認されている。

## 2. 2 別居生活の状況<sup>12)</sup>

開始された二重生活の状況を見ると、まず、別居期間では、5年以上10年未満の夫婦が最も多く、最長は23年間であった。夫婦の居住地としては、国際別居もあったが、国内の異なる地方で暮らすケースが最多となっていた。妻の住居や妻と子どもの住居を本拠世帯とする夫婦が7割を占めており、子どもを持つ夫婦37組のうち、過半数の母親が子どもと同居していた。帰省や訪問の頻度は、週1回以上が最も多かった。

この生活に付随しがちな家計の負担増やコミュニケーション阻害などの障害については、ほとんどの夫婦が別居開始の背景に確認された対等な親密関係と柔軟な発想・対応で切り抜けていた。

## 2. 3 コミューター・マリッジの評価と意義<sup>13)</sup>

この形態について、自分の異動で別居した妻（2割）は、「仕事に打ち込める」、「自分のペースで暮らせる」といった肯定的な評価を下したが、育児期にあって家事・育児に協力的な夫と離れた妻は、否定的な意見を述べていた。これは、この生活形態の適否が夫婦のライフステージと関連すること、また、育児期の夫婦に対しては何らかの援助が必要であることを示唆するものと考えられた。

この形態の意義としては、何と言っても、従来の家族帯同転勤で生じてきた妻の離職が回避できることにある。また、調査対象者からの「離れて暮らすので、家族の絆を維持するには意識的な努力が要ると気づかせられる」という発言も無視できない。

## 3. 回想録の読み解き結果と専門・管理職調査結果との対比

表1～表3は、通勤・マリッジ開始の経緯、別居生活の状況、およびその評価と意義について、加藤著回想録の読み解き結果と専門・管理職調査結果を、箇条書きの形で対比させてみたものである。各表において、以下の諸点が考えられた。

### 3. 1 コミューター・マリッジ開始の経緯

表1で別居開始の契機を見ると、専門・管理職調査では、「妻の異動」も2割あったものの、「夫の異動」が半数を占めた。加藤の場合は「夫」の就農と移住で開始されたから、この点に関しては同調査の大勢と近似する。

しかし、別居の決定に関しては大勢と異なる。同調査で析出された別居決定の全8要因のうち、加藤が持ち合わせていたのは要因④「仕事への積極的な関与」だけである。

彼女にはまず、要因①「別居事態の予測と備え」が欠けていた。予測も備えもない状態の時に他者から唐突に大事を提案されたなら、だれもが別居の決定をためらうにちがいない。夫の提案に加藤が不安や葛藤、疑惑を抱いたのも、無理からぬことであった。

また、要因⑥「家事・育児協力者の存在」についても、育児期の真っ只中にある加藤にとって必須な要素であったにもかかわらず、夫の移住につき従った場合にはこれを欠くことが予想された。

さらに、要因⑤の「結婚観・家族観」についても、夫、藤本のそれは革命家にしては保守的であった。それでも、離婚が回避できて別居生活に踏み出せたのは、本音で語り合っただけで社会通念とは別の夫婦像を描



くよう改めたためであった。もっとも、獄中結婚をしたほどの間柄であるから、互いに人生のパートナーとしての意識は高く、その素地はあったとみられる。

表1 コンピューター・マリッジ開始の経緯

| 項目      | 回想録の読み解き                      | 専門・管理職調査                                      |
|---------|-------------------------------|---|
| 開始の契機   | 夫の就農・移住                       | 夫の異動が半数<br>妻の異動は2割                            |
| 別居決定の要因 | 移住先で家事・育児協力者を欠く恐れ<br>曲作りに励みたい | 全8要因あり。うち、次の2要因は必須<br>・仕事への積極関与<br>・柔軟な結婚・家族観 |
|         | 夫の結婚観の変化                      |   |
| 開始の背景   | 固定観念の放棄で離婚の危機脱出               | 本人に有益な異動                                      |
|         | 人生の伴侶としての配偶者選択あった             | 対等な夫婦関係                                       |

### 3. 2 別居生活の状況

表2の別居期間について、専門・管理職調査で平均年数は約5年であったが、加藤は21年となっている。本来一時的な別居が永続的なものとなる可能性については、ウィンフィールドも指摘しており<sup>14)</sup>、現に、同調査でも最長は23年であった(1組)。

夫婦の居住地は、専門・管理職調査で国際別居もあったが、加藤の場合は同じ関東地方内と、比較的近距離にある。この点は、少なくとも、別居決定の阻害要因にはならなかったと思われる。同居子の所在については、専門・管理職調査の大勢と一致している。

訪問状況については、専門・管理職調査で毎週末が4割強であった。加藤の場合、どれほどの頻度であったか、回想録からは不明であるが、長い休みには必ず、子どもたちと共に夫の元を訪れていたこと、また、相手宅では互いにお客になるという方式であったことは読み取れた。

表2 別居生活の状況

| 項目     | 回想録の読み解き  | 専門・管理職調査 |
|--------|-----------|----------|
| 別居年数   | 21年       | 平均：約5年   |
| 夫婦の居住地 | 妻：東京、夫：千葉 | 国際、国内、県内 |
| 同居子の所在 | 妻側        | 妻側が約9割   |
| 訪問状況   | 夏休みに子が訪問  | 毎週末が4割強  |
|        | 相手宅ではお客に  |          |

### 3. 3 コンピューター・マリッジの評価および意義

表3で当該結婚形態についての評価を見ると、専門・管理職調査では、対象者が育児期にいるか、あるいは自分の異動で別居したかが関連していた。加藤においても、育児期真っ只中であった当初には忌避されたものの、世間で主流の同居夫婦による紋切り型の結婚観を放棄してからは、子どもの成長につれて、むしろ楽しみに変化して行った。夫の夢も理解できるようになり、遂には、夫婦揃って安定した「持ち場」を確保することになった。

コンピューター・マリッジの意義としては、夫婦とも仕事と親密関係の維持が可能になることのほかに、専門・管理職調査では、意識的な努力による家族の絆の維持が指摘された。加藤たちについては、独自の夫婦像確立で双方の自己実現を果たしたこと、また、ふたりの関係に留まらず、世間の人びとと次世代に向けてライフスタイルの問い直しを提起していることにある。

確かに、加藤が今は亡き夫、藤本から受け継ぎ、未来に手渡そうとしている「農的生活」の理念と実践は、注目に値する。自分の手足で自分の生活を生み出すこと。これこそ、便利だけれど他律的な暮らしを営むようになった今日、一人ひとりが常に銘記すべき基本事項であるように思われる。

表3 コミューター・マリッジの評価・意義

| 項目 | 回想録の読み解き                                 | 専門・管理職調査                         |
|----|--|----------------------------------|
| 評価 | 子どもの成長につれ次第に楽しみに変化<br>夫婦双方における自己の存在位置の確保 | 育児期にあるケースで否定的<br>自分の異動による別居者は肯定的 |
| 意義 | 独自の夫婦像による夫と妻の自己実現<br>世間と次世代に向け生き方再考の提起   | 仕事と家族の保持可<br>家族絆の意識的形成           |

### 【まとめ】

歌手、加藤登紀子の回想録に記されたコミュニーター・マリッジの実態と含意を明らかにすべく、それを読み解き、筆者による専門・管理職調査結果と対比してみた。その結果、以下の知見を得た。

①この夫婦別居形態は通例、一時的な対応とされるが、加藤のそれは21年の長期に渡った。②別居の契機は夫の就農・移住で、これは夫の異動が半数を占める筆者調査結果の大勢と近似する。③別居の決定にあたり同調査結果で少ない逡巡や葛藤が、加藤においては認められ、一時、離婚の危機にも遭遇している。④その主因は、別居事態への予測と備えの欠如、移住先で家事・育児協力者が確保できなくなる恐れ、そして、夫の保守的な結婚観にある。⑤しかし、社会通念から自由になることで離婚の危機が回避できたばかりか、別居生活を積極的に楽しめるようになり、遂には、夫婦双方の自己実現も果たされた。⑥加藤が継承する亡夫、藤本の「農的生活」の理念と実践は、私たち一人ひとりにライフスタイルの問い直しを求める。⑦彼女のコミュニーター・マリッジには、夫婦の仕事と親密関係の維持・発展を超えて世間と次世代に繋がる意義が含まれると考えられた。

### 【注】

- 1) この解釈については、三善勝代. 転勤と既婚女性のキャリア形成. 白桃書房, 2009, p.5. 参照。
- 2) 質的調査法におけるドキュメントの扱い方に関しては、北澤毅・古賀正義. 質的調査法を学ぶ人のために. 世界思想社, 2008, p.54-57を参照した。
- 3) この調査の詳細については、前掲書1). の第2章と第3章を参照されたい。
- 4) 加藤登紀子. 青い月のバラード. 小学館, 2007, 237p.
- 5) 加藤登紀子・藤本敏夫. 絆. 藤原書店, 2005, 519p.
- 6) 加藤登紀子(編). 農的幸福論 藤本敏夫からの遺言. 角川学芸出版, 2009, 266p. などがある。
- 7) 前掲書1). p.38.
- 8) 加藤と藤本の略歴については、前掲書5). の奥付けから一部を引用。
- 9) 獄中の藤本の様子については、前掲書5). に詳しい。
- 10) マズロー A.Hの欲求階層説については、二村敏子編. 現代ミクロ組織論. 有斐閣, 2004, p.42-44. 参照。
- 11) 前掲書1). p.36-61.
- 12) 同上書. p.63-70.
- 13) 同上書. p.70-72.

- 14) ウィンフィールド F.E.著. 三善勝代訳. コミューター・マリッジ—離れて暮らし、共に生きる—, 白桃書房, 1999, p.12.

**【引用・参考文献】**

- 二村敏子編. 現代ミクロ組織論. 初版, 有斐閣, 2004, 295p., (有斐閣ブックス).  
加藤登紀子・藤本敏夫. 絆. 初版, 藤原書店, 2005, 519p.  
加藤登紀子. 青い月のバラード. 初版, 小学館, 2007, 237p.  
加藤登紀子 (編). 農的幸福論 藤本敏夫からの遺言. 初版, 角川学芸出版, 2009, 266p.  
北澤毅・古賀正義. 質的調査法を学ぶ人のために. 世界思想社, 2008, p.54-57.  
児玉孝多編. 標準日本史年表. 第51版, (株)吉川弘文館, 2008, 64p.  
毎日新聞社 (編). 1968年に日本と世界で起こったこと. 初版, 毎日新聞社, 2009, 205p.  
三善勝代. 転勤と既婚女性のキャリア形成. 初版. 白桃書房, 2009, 295p.  
Winfield, Fairlee E.. Commuter Marriage : Living Together, Apart. 1st ed., Columbia University Press, 1985, 203p. (ウィンフィールド F.E.著. 三善勝代訳. コミューター・マリッジ— 離れて暮らし、共に生きる—. 初版, 白桃書房, 1999, 273p.)

三善 勝代 (和洋女子大学生生活科学系教授)

(2009年9月24日受付 2009年10月13日受理)